



シリーズ「アジアほっつき歩る記」第43回

常に変化するミャンマー

すが
須賀 つとむ
努

コラムニスト・アジアンウォッチャー

半年行かないと変化に取り残されると言われてきた最近のミャンマー。それはあくまでも大都市ヤンゴンだけの話だと思っていたが、ミャンマー全土でも色々な進化が見られるようになってきた。今回は恐らく殆どの日本人が行ったことのない、ミャンマーの南部、ダウェーから北東部の中国国境まで列車で旅をして、その変化を噛みしめてみた。

大幅に低下した電車料金

今回の旅は基本的にミャンマー国内を列車で旅するものだったが、列車のチケットを買う時に大きな驚



写真1 ダウェーから列車に乗る

きがあった。昨年より外国人に課していた米ドル払いが廃止され、ミャンマー人も外国人もミャンマーチャット払いしか、チケットを購入できないとは聞いていた。だがその料金もいわゆる外貨建ての外国人料金が廃止され、ミャンマー人料金に一本化されていた。これにより、例えばヤンゴン-マンダレー間（約15時間）の特急寝台（1室4名のコンパートメントの1名分料金）は、従来の33米ドルから、12,750チャット（約10米ドル）となっており、料金は3分の1以下に低下していた。

この状況は1990年代半ば、外貨兌換券を廃止し、為替を一気に3割も切り下げ、レートを統一した中

国の政策を思い起させた。その時も飛行機、鉄道料金として課されていた外国人料金が廃止されたが、人民向け料金自体は引き上げられたと記憶している。今回ミャンマーが料金を引き上げなかったのは、外国人客の利用が多くはなかったということだろうか。それともバスやLCCに対抗する必要があったということだろうか。

また従来『ミャンマー国鉄は時間が掛かり過ぎる』との指摘が多くあり、以前シャン州で乗った列車が2時間でわずか2駅しか進まなかつた事例（途中で大量の荷物を積み込んでいたため）を見ても、その効率にはかなりの疑問があった。だが今回乗った3回の長旅では、基本的に時刻表通りに運行され、ほぼ定刻に到着するなど、相当の進歩が見られた。『毎日ほぼ遅れるタイ国鉄よりよほどマシ』との声が聞かれた。

但し線路のメンテナンスはあまりされておらず、欧米人からは『ジャンピング・トレイン』とあだ名されるほど、搖れがひどい状態であり、スピードが出ない区間が多いことは一応明記しておく。食事は駅の売り子から買うケースが多いが、列車が走り始めると食べるのに一苦労する。現時点でミャンマーの鉄道に乗る外国人は、鉄道ファンぐらいかと思われる。普通なら道路が整備された高速バスか、最近増えてきた航空路線を利用するのが賢明である。

携帯電話がどこでも繋がる

日本でも最近注目されているミャンマー南部の都市、ダウェー。元々はミャンマーとタイで進めてい



撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の
駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆
活動に取り組む。



た東南アジア最大規模の「ダウェー経済特区」の開発に日本が参画すると伝えられ話題になっているが、今回バンコックからカンチャナブリまで鉄道、そこから国境まではバス、そしてミャンマー側のダウェーまではタクシーを乗り継いで行ってみたが、現時点では交通量は殆どなく、道路の整備もなされていないとの印象。ダウェーの街と港の間も相当に離れており、街では経済特区に関するものは全く見られなかった。

そんなダウェーで携帯電話のシムカードを購入した。実は昨年11月にヤンゴンで購入しようとしたが、発売直後だったためか、何軒もの店を回る羽目になった。ようやく買えても、使えるのはヤンゴン、マンダレー、ネピドーの主要都市3つのみという不便さだった。ところが今回は地方都市でも簡単にカードが購入でき、昨年は15,000チャットしたカードが、何と10分の1の1,500チャットになっていた。しかもダウェーだけでなく、ミャンマーのある程度の街なら、どこでも繋がっており、列車の中でも、中国国境の街でも通話ができた。僅か数か月の間に、基地局が増えたのか、これだけ普及したことには驚きを隠せない。

因みにインターネットも少し前は、繋がる所が限られており、しかもその速度はかなり遅かったが、今や地方のホテルでも、普通に繋がっており、今回の旅



写真2 ダウェーの携帯ショップ

ではネット接続の苦労が以前とは比べ物にならないほど、軽減されていた。

為替は弱含み

そして昨年と比べて、特に気になったのが為替レート。昨年11月、1米ドルは960チャット前後だった両替レートは、今回1,250チャットを越えていた。これは30%近くチャットが安くなったことを意味する。ヤンゴン在住の友人の話では、『銀行から300米ドルを引き出そうとしたら、全て1ドル札を渡された』などという信じられない話もあり、現時点でミャンマーの外貨資金繰りはちょっと厳しいのではないか、と思ってしまう。

特にヤンゴンではここ数年、不動産価格が高騰していたが、さすがにそのバブルは収束方向にあると言われている。家賃なども低下傾向にあると聞こえてきており、海外から流入していた投資マネーが徐々に逃げて行ったのでは、と推測させられる。これまでの投資マネーに頼った一時的な経済成長が終わり、ミャンマー経済は本格的な、地道な成長努力が必要になってきたと言わざるを得ない。

そこで一番懸念されているのが、11月に行われる大統領選挙の行方。日本ではスー・チーさんの立候補資格などで騒いでいるが、現地に行けば、そんな話をしている人はおらず、『如何に現政権の経済政策が継続されるか』『政権が変われば、軍部の影響が心配』といった声がよく聞かれた。色々な問題はあるにせよ、現在の政策継続が望ましいというのだが、果たして新政権はミャンマーをよい方向に持っていくか、改革が止まらないことを祈る。